

この本を薦めます

学会誌編集委員長 佐々木 葉

第8回



大村 拓也

写真家

今回は、大学で土木を学び、土木の目線から写真を撮る若き写真家大村さんです。今日に至るまでの人生節目の選択を後押ししてくれた本をご紹介します。紹介いただきました。

土

木の分野には鉄道好きが多い。大村さんは親の代から

つづく鉄道好き。自然な流れでカメラを手にし、ジオラマで鉄橋をつくり、将来は機械、電気、土木のいずれかに進もうと思っていた。そして

高校3年の夏休み、本屋で『新幹線をつくった男―島秀雄物語』と出会った。ご存知の方も多いであろうこの本は、夢のプロジェクトを技術者が困難を乗り越えながら実現して

いく物語である。主人公の島は機械屋であったが、リーダーとしてプロジェクトを統括していく仕事をしたいと思った大村さんは、土木にその期待を託す。

土木工学科に進学後、すでに写真が生活の一部になっていた大村さんは、結婚式披露宴の撮影をアルバイトとして始める。今日までもそれは続き、先日11年目にして1000組の撮影を成し遂げた。実は大村さん

は母校早稲田大学の卒業式に毎年ボランティアで記念撮影をしに来てくださる。その立ち居振る舞いは本当にプロ、と感心する。

そうした仕事としての撮影と並行して、鉄道からいったんはなれてまちや風景にレンズを向けはじめ。写真への

新幹線をつくった男 島秀雄物語

高橋団吉：
小学館



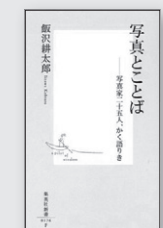
蒼穹の昴 (全4巻)

浅田次郎：
講談社文庫



写真とことば — 写真家二十五人、 かく語りき

飯沢耕太郎：
集英社新書



思いは募るばかり。しかしこれを職業とするか、かたぎの土木屋となるか、その決断をなんとなく先延ばしにしていた時期に読んだのが浅田次郎の『蒼穹の昴』であった。激動の中国清朝末期を生きた同郷の若者二人を核に展開する長編小説である。二人はそれぞれに天下を動かすという予言を与えられ、エリート文官と宦官かんがんという異なる道で出世を遂げていく。この本を読み、天命には決して抗あがえないことを察すると同時に、根拠を飛び越え写真家としてやっていけるといふ確信を得る。

卒業後、土木写真ですでに世に知られていた西山芳一氏のアシスタントを経て独立。日経コンストラクション等の取材を精力的にこなす写真家となった。取材対象をどう撮影するか。工程や光、そしてアングル。シャッターを切る時間と空間の選択を徹底的に考え、粘る。そうして得た一枚の写真と同じくらい大切にしているのが言葉である。著名な写真家たちの言葉を集めた『写真とことば』は大村さんの目指す世界といえよう。2010年4月から土木学会誌に「土木遠景」を連載し、写真と言葉による作品に挑んだ(学会ホームページで閲覧可)。ピジュアルとしての写真表現だけでなく、書くことにも心血を注ぎながら、これから先ずっと土木を軸として今の仕事を続けていきたいと語る。いつも前向きな大村さんの仕事を見守っていききたい。



OOMURA Takuya

1982年生まれ。写真家。大学で土木を専攻。卒業後写真に針路をとる。大学4年間で苦勞しておさめた構造力学の知識を生かして、雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。